

研究者の横顔			
フリガナ	やちだ しんいち		
お名前	谷内田 真一	助成金額	300 万円
ご所属	大阪大学大学院医学系研究科 医学専攻 がんゲノム情報学		
研究テーマ	「胃カメラしながら膵がん検診」の社会実装に関する研究		
1：研究者になろうとしたきっかけ			
<p>私は消化器外科医として13年間、多くの患者さんの診療と手術に携わり、臨床の現場から数多くの学びを得てきました。しかし、全力を尽くしても救えない命に向き合うたび、医学の限界を痛感することもありました。2007年からの3年間、米国ジョーンズ・ホプキンス大学で最先端の膵がん研究に従事した経験は、私に大きな転機をもたらしました。研究は、時間をかけて真摯に努力を重ねれば、必ず未来の患者さんの力になる—その確信を得たからです。この実感が、「新たな知を生み出し、医療の進歩に貢献したい」という思いを強くし、研究者として歩む決意につながりました。</p>			
2：助成研究の内容紹介			
<p>本研究は、胃がん検診などで行われる上部消化管内視鏡検査の際に、膵がんの家族歴がある方や新たに糖尿病を発症された方など、膵がんのリスクが高い方を対象に追加で実施する検査です。まず、膵液の分泌を促す「合成ヒトセクレチン」という薬剤を静脈投与し、内視鏡で必ず観察する十二指腸乳頭部（膵管の出口）に細い専用カテーテルを当てて、膵液が混じった十二指腸液を安全に回収します。回収した液中の遺伝子変化を最新の高感度解析装置で調べることで、従来より早い段階で膵がんを発見することを目指します。この検査は通常の内視鏡に1～2分追加するだけで行うことができ、身体への負担が極めて少ない、新しい早期診断法です。</p>			
3：2の将来に繋がる結果予想・目標			
<p>近年、膵がんは「手術ができる段階で発見できれば、約半数の方が治癒を期待できる」時代に近づいています。そのため、膵がんを克服するための最も確実な道は、膵がんのリスクが高い方を対象に、手術が可能な早期の段階で病気を見つけ、適切な治療へつなげることです。現在、膵がんに特化した有効な検診法は確立されていません。しかし、本研究によって“潜んでいる早期の膵がん”を安全かつ確実に発見し、治療につなげることができれば、膵がん克服に向けた大きな一歩となります。本研究の成果は、将来の膵がん早期診断の新しい道を拓くことが期待されています。</p>			
4：全国の RFL 関係者に一言メッセージ			
<p>膵がんは日本で多い一方、毎年検診を受けていても早期発見が難しいがんです。しかし私たちの研究により、膵がんにも「早期に発見できる期間が存在する」ことが明らかになり、論文として報告してまいりました。日本では胃カメラが広く普及しており、この強みを生かして、新たな膵がん検診法を日本から生み出したいと考えています。リレーフォーライフの皆さまの活動は、多くの患者さんに希望を届けています。私たちもその思いに応えるべく努力を続けてまいりますので、今後ともご指導ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。</p>			